

『ゆたかな社会』に向けて

Toward the Affluent Society

西 村 理*

The concept of Utopia has been a recurring idea throughout human history. Historically, some individuals who endeavored to create affluent societies were influenced by the idea of a Utopian society. In reference to these individuals and their time periods, there appear to be three important factors requiring consideration in the development of an affluent society. These factors might be called the three E's: Economics, Ethics, and Environment.

Osamu Nishimura

JEL : B30

キーワード : ゆたかな社会、絶対的・相対的欲求、定常状態、ユートピア、3E

Key words : Affluent Society, Absolute & Relative Needs, Stationary State, Utopia, 3E

はじめに

学問の目的は、「よりよい生活」「ゆたかな社会」を実現することである。そのための生活の術を身につける方策や社会の仕組みの構築を追及することが、学問の使命であるといっても過言ではない。すなわち、学問の存在意義は生活の進歩・社会の進歩に資するか否かによって判断される。

経済学として例外ではない。経済学の始祖である A. スミス (1723~1790) 以来、それぞれの時代における政治体制や思想の流れを背景に、経済学の学問が構築されてきたが、それもすべて社会の厚生と発展のためであった。たとえば、19 世紀後半、限界革命を契機とする新古典派経済学には、市民革命以降に醸成されてきた市民的権利を反映させながら、「居住・職業選択の自由、思想・

* 同志社大学経済学部 教授

信仰の自由などという市民的自由をもっとも効率的に実現できる経済制度こそ市場経済制度であるという考え方¹⁾が背後に存在していた。すなわち、希少資源の私有制の下で私的利益を追求しても、市場経済制度は自由な分業と交換を通じて効率的な資源配分の実現を保障するシステムであることが示された。

ところが、20 世紀になると、市民的権利の要求が市民的自由から生存権や生活権へと進んできた。健康で文化的な最低限度の生活の営みを要求する生存権。そして、最低限の生活保障と安全保障を要求する生活権である。

まず、生存権を満たすためには、失業のない完全雇用の経済社会でなければならぬ。新古典派経済学の世界では、市場機能が円滑に働くがゆえに、失業の問題は発生しないと考えられていた。すなわち、人手不足になると賃金が上昇し、その結果、企業は労働需要を減らし、労働者の労働供給は増えて人手不足が解消される。逆に、人手が余ると賃金が下落し、企業の労働需要は増えて解消されることになる。しかし、1930 年代の大恐慌による大量失業の発生という歴史的事実は、新古典派経済学が虚構の経済モデルであることを証明した。そして、新古典派経済学を批判した J.M. ケインズ (1883~1946) の『一般理論』は、生存権を唱える市民的権利を達成する処方箋を提示したといえる。

大恐慌を克服し経済成長を実現した社会では、経済的なゆたかさを背景に、市民的権利は生存権から生活権へと拡大していった。すなわち、経済成長の果実は、失業対策や医療・年金などの社会保障制度の整備という形で、市民の生活権を実現する方向に振り向けられていった。経済的な繁栄が市民的権利を満たしながら一人当たりの国民所得を引き上げてきた。それでは、将来を見据えたよりよい生活、あるいは、ゆたかな社会とは、どのような生活なり社会を想定しているのだろうか。ゆたかさを実現するためには、なにが必要とされているのだろうか。本稿では、このような問題について、古今東西の先哲が残した考えを敷衍しながら考えていくことにする。

1) 宇沢弘文 [2000] 『社会的共通資本』岩波新書 (696)、P.28 を参照。

経済の問題とは？

いうまでもなく、ゆたかな社会は経済的な豊かさだけを意味するのではない。たとえば、ケインズは『わが孫たちの経済的可能性』²⁾の中で、人々の必要とするものを絶対的な欲求 (absolute needs) と相対的な欲求 (relative needs) の二種類に分けて論じている。前者は他の人々の状態に関係なく、絶対的な意味で必要とされるものである。この絶対的な欲求に関わる経済問題については、ケインズによれば「重大な戦争と顕著な人口の増加がないものと仮定すれば、経済問題は、100年以内に解決される。」³⁾

ところが、後者は他の人々との相対的な関係において、優越感 (魂の高揚感) を充たすために必要とされるものである。この優越の欲求⁴⁾は経済問題が解決された後に浮上してくる人間社会における恒久的な問題で、「科学と指数的成長によって獲得される余暇を賢明で快適で裕福な生活のためにどのように使えばよいのか」⁵⁾という問題である。すなわち、経済の問題は生存権や生活権に関わることであり、科学の進歩と経済成長によっていずれ解決される問題である。そして、経済的な苦しみから解放された暁に、余暇 (自由な時間) が生まれてくる。この余暇の使い方、人生の過ごし方が人々にとっての恒久的な問題となる。そこで、ケインズは余暇の時代、ゆたかな時代に主役となるのは貪欲さや高利を追求する国民ではなく、「その豊かさを享受することができるのは、活力を維持することができて、生活術そのものをより完璧なものに洗練し、生活手段のために自らを売り渡すことのないような国民であろう」⁶⁾と予言している。

このケインズの考え方は、J.S. ミル (1806～1873) の『経済学原理』で唱え

- 2) ケインズ、J.M. [宮崎義一訳、1981]『ケインズ全集』第9巻 説得論集、東洋経済新報社。
- 3) 前掲書、P.393 を参照。
- 4) 優越の欲求を平易に表わせば、「自分の中で幸福だと感じているだけでなく、自分の生き方を他人から祝福され、また、自分が他人の幸福に役立っていると実感することで、自分も幸福になる」という欲求である。山田昌弘+電通チームハピネス [2009]『幸福の方程式』ディスカヴァー携書、P.79 を参照。
- 5) ケインズ、J.M. [宮崎義一訳、1981]『ケインズ全集』第9巻 説得論集、東洋経済新報社、P.395 を参照。
- 6) 前掲書、P.395 を参照。

られている「定常状態」(stationary state)に通底している。ミルによれば、資本の増大、人口の増加および生産的技術の進歩で規定される社会の経済的進歩は無際限ではなく、必然的に停止する状態に向かうと考えている。この到着点が定常状態である。すなわち、定常状態は資本の増大や富の蓄積がなく、人口増加もない経済状態と定義されている。

しかし、定常状態は経済的な進歩が停止した状態ではあるが、社会にとって最善の状態、すなわち、「たれも貧しいものはおらず、そのため何びともっと富裕になりたいと思わず、また他の人たちの抜け駆けしようとする努力によって押し返されることを恐れる理由もない状態」⁷⁾である。このような定常状態では、資本の増大や人口の増加はみられないが、人間的進歩が存在している状態である。すなわち、経済的進歩よりも人間的進歩が大切であり、定常状態と両立し得ると、ミルは主張している。

ミルにとっての理想状態は、思索または人格を深めるために必要な孤独の時間(余暇時間)を持つことであり、自然の美観壯観は思想と気持ちの高揚にとって不可欠な条件になっている⁸⁾。このように理想の社会とは、精神的文化、モラル(道徳)、社会的な進歩が絶え間なく続けられている状態である。「生活の術」を改善し人間的に進歩する余地が充分存在している状態である。ケインズの言葉を借りれば、経済的至福の社会であり、絶対的な欲求は充たされ、相対的な欲求が求められる社会であろう。

経済的至福の社会に至る道程は、ケインズによれば、①人口の調整能力、②戦争や内乱の回避、③自発的な科学的な管理、④資本蓄積の4つの条件によって決定づけられる。爆発的な人口増加や戦争などによる経済的な破壊が行なわれていないが、しかし、人口増加も資本蓄積も停止している状態ではない。必ずしもミルの定常状態と同じではない。ただ、経済的価値、物質的価値が重要視されていない社会であり、非経済的な問題に精力を傾ける社会という意味では同じである。

7) ミル、J.S. [末永茂喜訳、1961]『経済学原理』(四)、岩波文庫、P.105-6 を参照。

8) 前掲書、P.108 を参照。

ガルブレイスの「ゆたかな社会」

ケインズの死後、半世紀以上経ったが、果たしてケインズの予言したようなゆたかな時代が到来しつつあるのだろうか。その徴候を米国社会で少し垣間見ることができた。

J.K. ガルブレイス（1908～2006）の著作の中で、最も重要で影響力の一番大きかった書物は『ゆたかな社会』（The Affluent Society）であると、著者自身が語っている⁹⁾。この著書の初版が出版されたのは1958年だが、1950年代の米国は高い経済成長率と低いインフレ率という安定した繁栄の時代であった¹⁰⁾。まさしく、絶対的な欲求の問題は克服され、相対的な欲求が問題にされる社会である。このような社会をガルブレイスは「ゆたかな社会」と名づけた。

ガルブレイスは「ゆたかな社会」の特徴として、第1に、消費者の欲求がセールスや広告によって作り出されていると指摘している。セールスの仕事や広告業はゆたかな社会の産物である。貧しい時代には、生きるために必要な消費者のニーズがあるから、生産者がニーズに合うモノを生産するだけだった。すなわち、人間の根源的な欲望が満たされていない社会では、そのような欲望に対する需要が供給を作り出すために、消費意欲を掻き立てるセールスや広告は不要であった。ところが、ゆたかな時代になると、モノの生産者が消費の欲望を作り出し生産を一層増やすように仕掛けたり、あるいは、新しいモノの生産を必要とするような状況に変わっていく。いわゆる依存効果に基づく欲望が生み出され、「リスの車輪」のように走り続けられない限り、社会は破綻する仕組みになっていると主張している¹¹⁾。

第2に、ゆたかな社会では余暇時間が増えているが、この現象を説明する場合、「労働時間が短縮した理由に、時間当たりの生産が増大したとする考え方は一面的である」¹²⁾として批判している。それよりも、モノの非重要性に目を向

9) 日本経済新聞『私の履歴書（21）』2004年1月22日朝刊。

10) 1950年代の米国の実質成長率が年平均3.8%、インフレ率は同じく2.9%であった。川辺信雄・原照史編 [1994] 『アメリカの経済』早稲田大学出版部、表2-1を参照。

11) ガルブレイス、J.K. [鈴木哲太郎訳、1978] 『ゆたかな社会』（第三版）岩波書店、第11章を参照。

12) 前掲書、第23章を参照。

けるべきだと主張している。というのも、もしモノの重要性が増しているならば、労働時間を増やしてモノの生産を増やしていけば対処できるからである。むしろ、モノの限界的な緊要性が低下していることによる反応が、労働時間の短縮に繋がっているのであり、労働時間の短縮がモノのゆたかさの増大と直結しているとするのは誤った見方になってしまう。これが第 2 の特徴である。

第 3 の特徴として、「新しい階級」の台頭が指摘されている。新しい階級は、かつてのような有閑階級と違って労働に従事してはいるが、給与だけが重要な関心事とは思っていない。何にもまして「威信」が最も重要で、それが仕事から満足を生み出す源泉になっている。新しい階級に属する人々が就く職種には、コピーライター、実業界の大立者、詩人、あるいは大学教授など頭脳労働を主とする仕事が含まれている。そして、新しい階級の人々が得る報酬は、「肉体労働をまめかれること、退屈さと制約ときびしい平凡さから逃れること、肉体的に気持ちのよいきれいな環境の中で生活できること、ある程度は自分の思想を一日の仕事に適用する機会があること」¹³⁾であり、金銭的な満足とは違うものを目指している。

新しい階級の進出は、ガルブレイスによれば知的、文学的、文化的、および芸術的な需要に影響を与えることになる。モノの基本的な欲求が満たされ、限界的な緊要性が低下すると、人々の関心は静謐で楽しみや美しさを満喫できる世の中での生活である。特に、生活に潤いをもたらす音楽、絵画、陶芸、映像芸術、デザインなどに目が向けられ、芸術家の役割が大きくなっていく¹⁴⁾。A. トフラーは、1964 年に出版した『文化の消費者』(The Culture Consumers)の中で、「芸術の大衆化・日常化と複製技術の普及によって、文化の消費者が出現してきた」¹⁵⁾と述べている。そして、このような文化の消費者は、男女を問わず若くて、経済的にゆとりがあり、高学歴を有している。また、その家族の職業は専門家、技術者、経営者といった者が高い割合を占めているのを特徴とし、ガルブレイスのいう「新しい階級」層に属する人々である。そして、彼

13) 前掲書、第 23 章を参照。

14) 日本経済新聞『私の履歴書 (27)』2004 年 1 月 28 日朝刊。

15) トフラー、A. [岡村二郎監訳、1997]『文化の消費者』勁草書房、第 3・4 章を参照。

らの文化への需要動機は、単なるステイタス・シンボルに留まらず、高度工業化・規格化社会にあって自分のアイデンティティを取り戻すための自己実現を追究することにあった。

このように、ガルブレイスやトフラーが米国社会に新しい芽吹きを予測したにも拘わらず、相対的な欲求を未だに実現できない理由の一つに、ケインズが警鐘を鳴らした戦争があった。1960年代のベトナム戦争を皮切りに、現在までアフガン・イラク戦争と巨費を投じながらも泥沼にはまり込んでしまった。二十世紀はパックス・アメリカナといわれた時代でありながら、世界の国々から尊敬の念、優越感を勝ち得られなかった原因の一つにもなっている。

歪んだ日本のゆたかさ

翻って、日本ではゆたかな社会が出現したのだろうか。

1973年の第一次石油危機を境に高度経済成長の時代は終わり、高度大衆消費社会を迎えた。事実、電機冷蔵庫、電機洗濯機、テレビなどの電化製品や乗用車などの耐久消費財はほとんどの家庭で普及してきた。それと軌を一にするように、日本のGDPが世界に占める割合も増え、1980年にはおよそ10%程度だったシェアが、1990年には15%にまで上昇している。文字通り日本は経済大国へと成長し、米国に次ぐ大きなマーケットとして世界中から注目されるようになった。一人当たりの国民所得も、為替レートによって順位は多少変動するものの、先進国の中では常に上位にランクされている。同時に、ガルブレイスのいう楽しみのために消費する社会に変わってきた。梅棹忠夫によると、1970年の大阪万国博覧会は、従来の博覧会で行われてきた自社製品の「見本市」という発想から転換して、「文化のお祭り」というコンセプトで開催が仕掛けられたという。その結果、「大衆、国民は“遊び”の楽しさを覚える、散財を覚えるようになった」¹⁶⁾と指摘している。文化の消費者が出現する契機となったイベントであった。

ところが、日本は経済的にゆたかになったものの、それが生活のゆたかさに

16) 梅棹忠夫・端信行「文化経済学への期待」文化経済学会論文集第2号、P.7を参照。

果たして繋がっているのかどうか。このような疑問を抱いてゆたかさの意味を問うているのが、暉峻淑子の『豊かさとは何か』である¹⁷⁾。

暉峻の著書が出版されたのは、まさに 80 年代後半、日本社会が「バブル経済」に酔いしれているときであった。国内では、海外のブランド商品に狂奔するファッション・ブーム。キャビアや高価なワインを注文して豪華な食事を楽しむグルメ・ブーム。億ションと呼ばれる高級マンションの販売。さらには、「シーマ現象」と名づけられた高級車ブーム。華美と豪華さを競う衣食住の追求や高級な耐久消費財への需要が幅を利かせていた。また、高い経済力と折からの円高を背景に、海外旅行者も 1989 年には年間 1,000 万人を突破した。さらには、豊富な資金力にものを言わせて、日本のマネーが海外の不動産を買い漁ったり、海外の企業を買収したりする動きが目立った。熱狂にうなされた状況を指して、80 年代の世相は「リッチ現象」とか「貴族的消費社会」とか「新中間層社会」と名づけられて、「文化の消費」が始まったと盛んに喧伝されたりもした¹⁸⁾。しかし、90 年代初めにバブルがはじけ平成不況に陥ると、熱狂的な特徴は泡沫のように消え去ってしまった。「文化の消費」とは言えないようなバブル現象だった。

事実、海外では「金満国・日本」とか、日本人は「うさぎ小屋に住む働き蜂」とか揶揄された。泡沫の実態を暉峻は旧西ドイツの社会と比較しながら、ゆたかさの意味を検討している。そこでの論点によると、「ゆたかな生活」とは「ゆとりある生活」そのものである。ところが、日本の社会はゆとりある生活からほど遠い状況に置かれていた。というのも、劣悪な状況を作り出している日本独特の要因が多く存在するからである。たとえば、すし詰め電車の通勤地獄や長時間の通勤。残業・休日出勤などの過酷な労働時間。住宅価格が高い割には居住空間の狭いマイホーム。子どもたちの夜遅くまでの塾通いや過熱した受験競争。貧弱な医療・介護サービス。これらの人間性を無視した問題を置き去りにしたままで、数量的な数字で測られた物質的なゆたかさのみに目を奪われてきたのが、日本の現状であると批判している。

17) 暉峻淑子 [1989] 『豊かさとは何か』岩波新書 (85)。

18) たとえば、星野克美編 [1989] 『文化の消費が始まった』日本経済新聞社を参照。

いまや経済大国といわれる経済力の増大は、人々からゆとりある生活を犠牲にして成り立っている。貧弱な医療・介護サービスや不十分な老後保障、あるいは、劣悪な住環境や野放しの土地政策が、過酷な労働へと向かわざるを得ない状況を作り出してしまった。すなわち、ゆとりと安心を保障する社会的なセーフティーネット（安全網）が崩壊してしまった結果、必死で働かざるを得ない状況に追い込まれてしまっている。したがって、社会保障や社会的インフラストラクチャーを充実させることこそが、ゆとりある生活に不可欠だと論じている。また、子どもたちを塾通いやいじめ・校内暴力に駆り立てる教育制度。地上げの促進や貸し剥かし・貸し渋りにみられた社会的秩序や道徳を無視した融資に奔走する金融制度。これらの問題の根底には、制度的な欠陥と非人間的な制度の管理・運営が指摘されていて、これらの是正がいまでも喫緊の課題であることは言うまでもない¹⁹⁾。

ガルブレイスも暉峻も「カネ儲け」や「モノを買う」ことの経済的なゆたかさを否定しているのではない。「ゆたかな社会」や「ゆとりある生活」にとって、経済的なゆたかさは不可欠の要素である。しかし、経済的なゆたかさはこれらを実現するための必要条件であっても十分条件ではない。物質的なゆたかさは生活の便利さをもたらした反面、失ったもの・無駄なものもある。たとえば、ガルブレイスの主張するように、広告・宣伝で作られ出した無用な欲求、見栄や見せびらかしのための消費などがそうである。あるいは、暉峻が強調するように、過労死、受験競争、老後の不安、環境破壊などもそれに該当する。経済的なゆたかさで得たものよりも、むしろ失ったもののほうが大きいかもしれない。

総理府の「国民生活に関する世論調査」によると、心の豊かさと物の豊かさを重視する割合は、高度成長期が終わる70年代後半になるとほぼ同じくらいであった。ところが、80年代になると心の豊かさを重視する割合が増え続け、90年代後半にはおよそ60%にまで達している。そして、物の豊かさを重視する割合は30%弱にまで下がってきている。このデータが示しているところ

19) 宇沢弘文が提唱する社会的共通資本の重要性も、このような考え方が根底にある。宇沢弘文 [2000] 『社会的共通資本』岩波新書 (696)。

は、心の豊かさと物の豊かさのバランスが崩れていることを意味している。良い意味に解釈すれば、経済的にゆたかになったが、それに精神的な余裕が追いつかない状態なのかもしれない。あるいは、悪い意味に解釈すれば、経済的なゆたかさが、人々の心を荒んだものに変えてしまったのかもしれない。

第二次大戦後、日本は大きな戦争を経験せずに過ごしてきた。また、絶対的な欲求を充たす経済的ゆたかさを実現してきたが、国民が優越感（魂の高揚感）を抱き相対的な欲求を得ている状況とは言い難い。経済的なゆたかさが歪んだ方向へ熱狂させたのだ。すなわち、カネ余りが株式や土地投機を過熱させた。特に、土地は本来投機の対象にすべきものではなく、生活空間・生産空間・自然空間として利用するもので、市場取引には馴染まないものである。司馬遼太郎は土地投機について、「土地をいたぶると、国も社会もほろびる」²⁰⁾と憂慮していた。バブル経済が拜金主義を根づかせたともいえよう。

ともあれ、ゆたかな社会を実現するためには、経済的なゆたかさと十分な自由時間が必須条件である。これらの条件が満たされたとき、ゆたかな社会にはさらになが求められているのだろうか。その手掛りを得るためにトマス・モアの「ユートピア」を紐解くことにしよう。

トマス・モアの「ユートピア」

人間はいつの時代も理想郷を求めている。その代表例がトマス・モア（1478～1535）の空想的な社会小説で知られる『ユートピア』であった。余りにも有名な作品であるため、ユートピアは理想郷の代名詞になっているほどである。ユートピア（Utopia）とは元来ギリシャ語で「無何有郷」、すなわち「どこにもない場所」を意味する言葉である。

ユートピアはゆたかな農業国である。失業者もなく、労働時間は一日僅か6時間である。ただ、農耕は困難で苦勞の多い仕事なので、都市の住民と田舎の住民が二年ごとに入れ替わるように仕組まれている。しかも、農耕技術が継承されるような入れ替え制度なので、食糧不足が生じる心配がないとされている。

20) 司馬良太郎 [2001]『以下、無用のことながら』文藝春秋、P.17 を参照。

また、収穫期などの繁忙期には、都市から応援隊が繰り出される。さらに、田舎で入手できないものは、無料で都市から調達することができる社会である。食べ物も豊富で、ユートピア国で消費される量が正確に把握されているため、食糧不足の状態にならない。主要な農産物はパンを作るための麦である。その他には、ワインやリンゴ酒・梨酒・蜂蜜酒なども製造されている。家畜も飼われ、酪農も盛んに行われている。このように、食生活は飢餓や欠食からは掛け離れ、満足すべき状態にある。

生活に関しては、都市と田舎で暮らすことができ、希望すれば田舎に長期間にわたって滞在することも可能である。私有財産制度が認められていないので、家屋も社会の共有財産で、10年ごとに抽選で住まいを取り換えることができる。ユートピアは建国以来、長い歳月を経てきたが、その間住宅建設も大いに進化してきた。都市は城壁に囲まれ、家屋は便利に、かつ整然と配置されている。そのため、家屋の佇まいは壮麗を極め、美しい景観の街並みを形作っている。三階建ての建物で、外壁は漆喰もしくはレンガが用いられ、火事や風雨に強い家造りになっている。そして、また、家の裏には手入れの行き届いた庭があり、そこには葡萄を初めとするいろいろな果物や野菜や花が栽培されている。これらは個々人の娯楽で栽培されているのではなく、各人ごとに栽培の分担が決められていて、趣味と実益を兼ね備えた庭仕事に従事していることになる。

服装に関しては、ユートピア人は皮革製の質素な衣服をまとっている。外出するときに着る上着は羊毛で作られ、生地のままの色合いなので、全員同じ色の上着を着用している。したがって、毛織物の消費量は他国と比べて非常に少なく、値段も安く手に入る。すなわち、ファッションには無関心で、最も大切なことは清潔さを保つことにある。なに不自由なく暮らすには、真っ白な服が二、三着あれば充分であるという考え方である。

このように、人間がゆたかな生活を過ごすための必要条件としての「衣食住」は、ユートピア国では充分満たされている。それでは絶対的なニーズである「衣食住」以外に、ユートピアを形成する特徴はなにか、ということについてトマス・モアの考えをみていくことにしよう。

ユートピアにおける倫理

ユートピアはまた有徳の国でもある。徳がこのうえなく重んじられ、少ない法律でも物事が支障なく運ばれているところに特徴がある。というのも、私有制が認められず共有制のもとでは、私有財産を護ったり、他人の私有財産と区別するための法律を作る必要がないからである。すべてのモノに関して、平等の考え方が確立されている。この考え方の根底には、金持ちは貪欲で陰険で非生産的である一方、貧乏人は謙虚で純情で日々の労働によって自分の利益そのものよりもむしろ社会全体の福祉に多大な貢献をしている²¹⁾ という認識が存在するからである。さらに、倫理・道徳の行き届いた社会では、個人の自己規律・自己管理が徹底しているため、敢えて法律の網をかぶせることを必要としないからである。

倫理・道徳の背景には宗教がある。トマス・モアは敬虔なキリスト教徒であったが、『ユートピア』でも基本的には唯一神の存在を信ずる立場が貫かれている²²⁾。すなわち、他のいかなる宗教よりも、キリスト教が優れていることを主張している。したがって、信仰の自由を謳ってはいるが、基本的には唯一絶対の神の実在を認め、靈魂不滅に対して懐疑をはさむことはないという意味で、キリスト教を優位とする一神教の社会である。

トマス・モアは自由の天地をユートピア国に託し、人類の目標とする理想国家を夢みたのである。すべての住民が労働に従事し、人間の尊厳を守り、信仰心の篤い敬虔な人たちが集まった社会である。しかし、ユートピア国の管理・運営方法についての科学的根拠に欠けているため空想的社会主義と非難され、所詮は「無何有郷」と呼ばれる所以である。私有財産制度を否定することによる労働や財産価値を維持・増大させるインセンティブの欠如、生産の非効率性などは、その後のソ連を初めとする東欧社会主義国の崩壊を来した歴史が証明するところである。また、リベラルな社会を想定しながら、キリスト教を優位とするように信教の自由もなく、あるいは、ユートピア人すべてに同じようなライフ・スタイルを暗黙のうちに強要しているようなところにも、『ユートピ

21) トマス・モア [平井正徳訳、1957] 『ユートピア』岩波書店、第 1 巻 P.62 を参照。

22) 前掲書、第 2 巻第 9 章を参照。

ア』が開放的でなく息苦しさを感ぜさせてしまう要因にもなっている。

陶淵明の「桃源郷」

西洋の理想郷がトマス・モアの『ユートピア』で代表されるなら、東洋のそれは陶淵明（365～427）の『桃花源記』で代表されるだろう。陶淵明は、後世「隠逸詩人」と称えられるほど、美しい自然と田園風景を愛してきた。士族の家柄ではあったが、立身出世して営利を貪るような生き方を好まなかった。事実、官職に就いても長続きせず、仕官と帰田を繰り返していた。鬱々とした彼の胸のうちの詩に託したのが、41歳のときに書かれた有名な「かえりなんいざ帰去来兮」であった。「世俗との交遊を絶ちたいものだ。世間と自分とは相容れないのに、いまさら仕官して何を求めようとしているのか」²³⁾と詠っている。そして、故郷に戻れば、木々や花の美しさを愛で、さらに、親戚や友人たちとの語り、あるいは、読書や琴の演奏などに興じる楽しみを綴っている。

陶淵明の『桃花源記』は、わずか漢字 321 字の短い文章で描き出された理想郷である。格調高いこの作品は彼の代表作の一つに数えられている。「ある日、漁師が谷川に沿って船を漕いで行くうちに、兩岸に桃の花が咲く林に出くわした。その林は谷川の水源地まで続き、その向こうには小さな山があった。山にある狭い洞窟を抜けると、立派な家、手入れの行き届いた田畑、美しい池、桑や竹の植わった農村が豁然として現われた。そこに住んでいる村人は、かつて秦の時代の争乱を避けて移り住んだ子孫たちで、いままで外界と一切遮断して暮らしてきた。この漁師は数日滞在している間、村人たちから大いに歓待され満喫した日々を過ごして帰っていった。ところが、後日、役人と一緒にかの地を訪れようとしたが、杳としてその場所を探し当てることができなかった」²⁴⁾という物語である。

陶淵明の桃源郷は、トマス・モアのユートピアと違って、政治体制、法律制度、生活の経済基盤、人々の暮らしぶり、都市と農村の関係、他国との外交などについての記述はみられない。ユートピア国は海で囲まれた島国であったが、

23) 『陶淵明全集』岩波書店より引用。

24) 前掲書より引用。

桃源郷は秘境であり、あくまでも外界と遮断された世界である。また、西洋のユートピア作品に共通したテーマである共有制も、あるいは、労働や道徳・宗教についても一切伺い知ることもできない。ところが、ユートピア国よりも豊かさや華やかさが感じられ、極楽浄土を描いた世界と一脈通じるものがある。その理由の一端に、陶淵明が詩的な夢想の社会を描いているからでもあろう。しかし、それよりもなによりも、桃の花が咲き誇っている情景が、桃源郷を華やいだ世界に仕立てているからである。自然環境を強調しているところに、西洋のユートピア国とは異なる趣を醸し出す効果がある。すなわち、経済的なゆとりのみならず、漁師を歓待する村人の穏やかさや自然の美しさがイメージとして浮かび上がってくる。

「ゆたかな社会」に求められるもの

本稿では、「ゆたかな社会」に求められるものを検討している。ゆたかな社会にとってまず必要なことは、貧困から脱け出た社会である。当然のことながら、餓死や凍死に会わず、最低限の生活は保障された社会である。言い換えれば、日本国憲法の第 25 条で謳われている「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活」を過ごすことのできる社会でなければならない。すなわち、十分な所得を得て経済的なゆたかさが満たされている社会である。しかも、その経済的なゆたかさが、ゆとりある生活に繋がっている必要がある。ここでいうゆとりある生活とは、人間らしい生活が満喫できるという意味である。

ミルやケインズの主張によれば、ゆとりある生活には労働時間の短縮と自由時間の確保が不可欠である。確かに、苦痛の伴う無意味な労働は極力減らす方向へと社会を変えていく必要がある。しかし、ガルブレイスのいう「新しい階級」が従事する労働は、自己のアイデンティティを実現するタイプの仕事に属しているため、労働時間と自由時間の境界が定かではないと考えられる。というのも、生き甲斐のある労働に従事していれば、無意味な労働の桎梏から脱け出られ、働く意欲をもち労働の意義を感じることができからである。すなわち、生き甲斐のある労働とは、精神的な欲求を充足することであり、社会的な

意味を持つ労働である。端的に言えば、「良い仕事」²⁵⁾に従事していれば、自ずと人間らしい生活が過ごせるようになる。

また、人間らしい生活を満喫するためには、暉峻が指摘するような貧弱な社会保障を是正する必要がある。いわゆる社会的セーフティーネットの充実を図らねばならない。医師の偏在や救急病院のたらい回しなどの問題を解決するような医療保険制度の改革。老後の生活保障を不安にさせる年金制度、あるいは、ホームレスや自殺に追い込む貧弱な雇用保険制度や社会保障制度の改革などが挙げられる。

このように、ゆたかな社会では、まずケインズが意味する絶対的なニーズと社会的セーフティーネットの問題が克服されていなければならない。そのうえで、人々の関心が自然・文化環境に向けられている社会でもある。静謐で穏やかな人間らしい生活を営むためには、桃源郷のような美しい自然環境の中で生活し、知的、文化的、芸術的な相対的ニーズが求められる。それが延いては人の心をゆたかにし、生活に潤いをもたらすことにもなる。

さらに、生活が安定してくると、倫理・道徳が行き渡り節度ある行為へと導かれることは、トマス・モアの『ユートピア』から充分伺い知ることができる。あるいは、A. スミスの『道徳感情論』から引用すると、「中流および下層の人びとの多くは、「財産への道」を歩むことによって、「徳への道」を歩むこと（中略）になる。したがって、商業が発達して、より多くの人びとがビジネスに携わるようになれば、これらの徳が社会に広まることになる。」²⁶⁾ すなわち、「衣食足りて礼節を知る」であろう。

以上から要約すれば、ゆたかな社会には「3つのE」が不可欠になる。すなわち、Economics（経済）、Environment（環境）、そして、Ethics（倫理）の三要素である。果たして、「3E」が充たされた社会を構築することができるのだろうか。過去に、このような社会の営みを目指した事例があるのだろうか。

25) 「良い仕事」については、たとえば杉村芳美 [1997] 『「良い仕事」の思想』中公新書 (1381) を参照。

26) 堂目卓生 [2008] 『アダム・スミス』中公新書 (1936)、P.96-7 を参照。

光悦村にみる「3E」の社会

本阿弥光悦（1558～1637）は、1615（元和元）年の大阪夏の陣後、徳川家康より京都の郊外西北の地に「東西二百間余り、南北七町原」を拝領した²⁷⁾。面積は約 9 万坪で東京ドームの約 6 倍に相当する広大な土地である。しかも、「町中作取」の許しを得たため開発地主的な立場を活かして、この地に一族郎党と関係者から構成されたいわゆる鷹ヶ峯光悦村を興した。市中から鷹ヶ峯に移住して以来、代々本阿弥家を中心に隆盛を誇っていたが、その後近隣の金閣寺領の百姓が光悦村に侵入し、土地の支配権を巡る争いが起きた。そこで、延宝検地を機に 1679（延宝 7）年拝領地を幕府に返上し、本阿弥家は江戸に移り住んだ。

本阿弥家の本業は刀剣の鑑定・磨研・浄拭の三業であった。鑑定に関しては、豊臣秀吉が本阿弥家に折り紙（鑑定書）の発行許可を与えたため、本阿弥家の鑑定が箔づけされ権威づけられた。また、磨研は刀剣の研ぎが仕事であった。研ぎには砥石を必要とするが、京都は天然の砥石の産地であったため、江戸時代に入って本阿弥家が砥石山を支配してから幕府に上納した残りを売り捌くことができた。刀剣以外にも、カミソリ、カンナ、ノミなどの広い用途向けられ販売経路が広がった。浄拭は文字通りぬぐい清めることで、下とぎ、中とぎ、水仕立、拭い、磨きの五色の作業から成り立っている。五色のうち一色でも極めることが難しいが、光悦の養子であった光暉はすべての面で名人と言われていた。このように、本阿弥家は刀剣三業の専門家集団であり、鑑定の独占的な地位だけでなく、技術・技能にも裏打ちされて家業の隆盛を極めた。すなわち、十分な経済力（Economics）を備えていたことになる。

さらに、商いにとって大切な要素である正直正路が本阿弥家の家訓であった。「悪敷道具を以て本阿弥に見せれば、悪しき故に悪敷とたびたび申」²⁸⁾として、虚偽や偽装行為を厳禁した。さらに、「若此後当家へ悪人生れ来候とも、一門廿人に余り聊かも依怙ひるき仕間敷よしの誓紙をかき、総領も一門どもの方へ談合之上に、折紙出すべしとの起請文を書貴み申、則一門の寺本法寺の宝

27) 本節の議論では、正木篤三編著 [1993] 『本阿弥行状記と光悦』中央公論美術出版を参考にした。

28) 前掲書、上巻第 60 段。

蔵に納置申せば、行すゑ頼母しき家なり」と、独断を戒めると同時に、一族全員で合議のうえ鑑定する慣わしであった。すなわち、信用・評判を重視する家風で、倫理・道徳（Ethics）がしっかりと確立されていた。

最後に、自然・文化の環境（Environment）であるが、自然環境に関していえば、鷹ヶ峯は京都の市街地を遠望できる景勝地であった。その様子が「ことに面白きは朝まだき空は緑にうち晴て心に懸るくまもなきに、目の及ぶ限り霧の海となり、しげりたる森は嶋のごとし。木々の梢はふねに似たり。二條の金城、九條の塔、海上にうかみて雲をつらぬく」²⁹⁾と記されている。この美しい自然環境の中で、鷹ヶ峯一帯に文化環境を創り出した感がある。光悦は日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと呼ばれるような多芸多才な文化人であった。特に、近衛信尹や松花堂昭乗などと共に「寛永の三筆」として知られた能書家であった。その書跡以外にも、書画、陶芸、蒔絵、刀剣、作庭、茶の湯など多方面にわたる芸術活動に精を出し、芸術の総合プロデューサー、共同制作者として美術作業業者や素材提供者を招き集め芸術協団の如き組織を運営していたように思われる。殊に、鷹ヶ峯の地を拝領してからは、光悦自身は桃山時代に花開いた茶の湯を楽しんでいた様子である。

鷹ヶ峯への移住者は法華宗の信者であった。特に、光悦は熱心な法華信徒でカリスマ的な存在であった。京都・本法寺の経営に尽力し、諸国の寺院に扁額の揮毫や日蓮の立正安国論を書写している。そのため、法華宗の理想郷である「寂光浄土」の実現を求めたのかもしれない。兎も角、光悦の芸術村は、美しい自然環境に恵まれた鷹ヶ峯に住む人々が、ゆたかな経済生活を営み、正直正路を家訓としてすぐれた工芸美術の文化を展開し、およそ 65 年間安定的に持続した村だったと思われる。

その他にみる「3E」の社会

光悦以降もゆたかな社会の建設を目指した著名人がいた。たとえば、白樺派の小説家・武者小路実篤（1885～1976）もその一人である。彼は 1918（大正

29) 前掲書、上巻第 52 段。

7) 年に宮崎県児湯郡木城町に「新しき村」を建設した。彼の目指した「新しき村」では、自己を活かし、人間らしく生きる理想的・調和的な社会の建設を目的としていた。日本版ユートピアと揶揄されたこともあったが、農業による自給自足の生活で経済的な自立を図ろうとしていた。それと共に、共同生活の中で喜びに満ちた労働を実践する場でもあった。実篤自身は 6 年後に離村し村外会員になったが、村自体はダム建設を理由に 1939 (昭和 14) 年に埼玉県入間郡毛呂山町に移り、「東の新しき村」として現在も続いている。

同じく、詩人であり童話作家であった宮沢賢治 (1896~1933) は「羅須地人協会」を設立した。設立の目的は、農村文化の創造に努め、地元花巻の青年が自然生活に立ち返ることにあった。その趣旨は彼の『農民藝術の興隆』に明記されている。

「曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてみた
そこには藝術も宗教もあった
いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである」

と嘆きつつ、一部の宗教家や芸術家によって独占されている真・善・美を取り戻すために、

「いまやわれらは新たに正しき道を行き
われらの美をば創らねばならぬ
藝術をもてあの灰色の労働を燃せ
ここにはわれら不斷の潔く楽しい創造がある」

と呼びかけている。宮沢賢治は農民藝術を興隆させる目的で、まず経済的な自立を目指して農民講座を開設し、青年たちに農業を指導している。また、光悦と同じく熱心な法華経信徒でもあり、この世にやはり「寂光浄土」の実現を夢みていたのかもしれない。しかし、このような活動も宮沢賢治の病気のため短期間で活動の中止を余儀なくされた。

滋賀県長浜市の商家に生まれた西田天香 (1872~1968) は、1904 (明治 37)

年に「一燈園」³⁰⁾を創設した。今も「新しき村」と同じく京都山科の地で生活共同体を営んでいる。参加者全員（園内では「同人」と呼ばれている）が一つの家族として社会生活を営み、財産の無所有・懺悔奉仕の生活をしている。経済的基盤は出版業、印刷業、学校経営、すわらじ劇団の運営などの事業で支えられている。また、特定の宗教に帰依してはいないが、朝夕には「般若心経」や「維摩経偈」が誦経されている。

西田天香の考えによると、無所有で生きていけば、争いや対立のない平和な社会を築くことができ、お互いが仕合せになる無償奉仕の経済が実現される。このような考えに至った経緯は、彼が北海道の開拓事業を進める中で起こった資本主（出資者）と現地耕作者との間に生じた利害の対立、争いに直面した経験からであった。「一燈園」での暮らしには、トマス・モアの「ユートピア」にみられる共産的な生活に似た面を持っているように思われる。

おわりに

ゆたかな社会を彷彿させるような過去の事例を取り上げてきた。いずれの事例も志しの高いカリスマ的な人物の存在が大きな影響を与えている。しかし、そのような特定の人物に頼らず、社会システムとしてどのように「3E」の備わった「ゆたかな社会」を創りあげるかが今日的課題になってくる。

いうまでもなく経済（Economics）に関しては、日本はいまや世界のトップ・クラスに位置づけられている。経済力を端的に表わす指標の一つであるGDPは、早晚中国に抜かれるとしても世界第2位であり、一人当たりの所得にすると大きく水をあけている。文字通り、日本は経済大国である。

ところが、倫理・道徳（Ethics）について言えば、決して世界に誇れる状態にはない。モンスター〇〇と呼ばれる人たちの非常識な要求や日常の小さなマナーの乱れから、産地偽装や詐欺商法などの企業不祥事、あるいは、尊属殺人や無差別殺人など日本人の精神的荒廃が着実に進行している。トロイア遺跡を発掘したハインリッヒ・シュリーマン（1822～90）が清朝時代の中国と幕末

30) 以下の議論については、<http://www.ittoen.or.jp/index2.htm> を参照した。

の日本を訪れた旅行記が残されている³¹⁾。その旅行記によると、彼が初めて日本に上陸したとき税関に心付けを渡そうとすると、「日本男児たるもの、心づけにつられて義務をないがしろにするのは尊厳にもとる」³²⁾ という理由で拒否された。しかし、横柄な態度で接するのではなく、大変好意的で親切な応対であったと記している。さらに、武士だけでなく、一般庶民も礼儀正しく、また、日本人は世界でいちばん清潔な国民であると賞賛している³³⁾。しかし、西洋人を驚嘆させた日本人の気質は、戦後が遠ざかるにつれていつのまにか消え去ってしまったようである。

倫理・道徳の浸透は一朝一夕で成し遂げられるものではない。樹木が成長するように長い歳月を要する。その過程において、教育や宗教の果たす役割は大きいだろう。同時に、自然・文化環境 (Environment)³⁴⁾ の役割も無視できない。たとえば、スラム街が犯罪の温床になっている例は枚挙にいとまがない。環境の悪化は人の心を荒んだものにする。幸いにもわが国では、温暖な気候に加えて四季の移り変わりがはっきりしているため、豊饒な自然の恵みや美しい景観が各地に散在し、多様な風土が形成されてきた。また、長い歴史の流れに培われてきた重層的な伝統文化、それを継承・発展させてきた現代文化など有形・無形の文化に取り囲まれている。自然や文化は風土であり風儀である。各地方独特の形があり社会全体にとっての共通の財産である。延いては、地域や国家の品格を形成することにもなる。したがって、自然・文化環境は「国家の統治機構の一部として官僚的に管理されたり、また利潤追求の対象として市場的条件によって左右されてはならない。職業的専門家によって、専門的知見にもとづき、職業的規範にしたがって管理・維持されなければならない。」³⁵⁾

しかし、「3E」が備わっただけで、真のゆたかさが実現されると結論づける

31) ハインリッヒ・シュリーマン [石井和子訳、1998] 『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社学術文庫 (1325)。

32) 前掲書、P.78-79 を参照。

33) 前掲書、P.87 を参照。

34) 本稿では、環境の定義を自然環境のみならず文化環境も合わせて述べている。たとえば、世界遺産の登録に際しても、自然遺産と文化遺産の 2 つのカテゴリーに分類されているのと同じ考え方に依拠している。

35) 宇沢弘文 [2000] 『社会的共通資本』岩波新書 (696)、P.5 を参照。

ことはできないだろう。というのも、真のゆたかさは、心のゆたかさと切り離して考えることができないからである。言い換えれば、ゆたかな社会に住んでいるからと言って、心がゆたかだとは言えないからである。そして、この心のゆたかさは「人間の幸福」³⁶⁾とも関係している。トマス・モアも「(ユートピア社会で)一番根本的な問題は、人間の真の幸福はなにを、(中略)その基盤としているか」³⁷⁾にあると記している。さらに、トマス・モアは続けていう。「善良で健全な快楽の中のみ幸福がある、そしてそのような快楽に、(中略)われわれの本性そのものがじつに徳の力によってひきつけられてゆくのだ。」³⁸⁾この善良で健全な快楽の中、すなわち「真善美」の中のみ幸福があるというトマス・モアの意見に同意するか否かは別にして、心のゆたかさ、あるいは、人間の幸福にとって、徳の力(倫理・道徳)は欠かせない要素であることについては疑う余地はない。同時に、倫理・道徳だけでは息苦しい社会になってしまう。さらに、自然・文化環境が充実し多様な価値を認め合う共生の社会が、人間の心のゆたかさや人間の幸福を実現する基盤になり得るだろう。過去の事例から推察すると、この基盤の実現は決して夢物語ではない。

最後に、経済学の目的について F. ナイト (1885～1972) の考え方の一端を引用して、本稿を締め括ることにしよう³⁹⁾。

「経済政策の第一義的目的は、人生全体に占める経済政策の重要性を減ずることではなければならない。したがって、経済学研究の最高次の目的は、経済学の研究と実践が人間の意識の背景に退き、食、住その他の物理的欲求の充足が深刻に考えるべき問題ではなく当然のこととされ、『生産』『消費』『流通』がもはや問題ではなく人間の意識にもものぼらなくなり、大半の人類の努力と計画が真、美、人間関係の善や文化的成長に向けられるようになる日の到来を早めることではなければならない。」⁴⁰⁾

36) 「幸福」についての書物は枚挙にいとまがないほど多くある。これら多数の書物を渉猟して啓蒙的にまとめられた書物に、新宮秀夫 [1998] 『幸福ということ』NHK ブックス (838) がある。

37) トマス・モア [平井正穂訳、1957] 『ユートピア』岩波書店、第1巻 P.110 を参照。

38) 前掲書、P.111 を参照。

39) Knight, F. [1933] "Economic Organization," in *Readings in Microeconomics*, 2nd ed., by W.Breit and H.M.Hochman, Holt, Rinehart and Winstone.

40) 林敏彦 [1996] 『ハート&マインド経済学入門』有斐閣、P.238 より転記。